

LEONARD ETO

レナード衛藤



ニューヨーク生まれ。1984年より太鼓グループ「鼓童」に参加。演奏や作曲だけでなく、音楽監督としてそれまでの太鼓のイメージを一新する活躍でグループをリードする。ひとつのスタイルを作り上げたその独創的な太鼓アンサンブルは、国内はもとより欧米の音楽シーンやエンタテインメントにまで大きな影響を与える。1992年に鼓童を離れ、ソロ活動を開始。これまでに50カ国を超える国々で演奏活動を行っている。

1993年に行われたソロデビューライブ“Leo Project”（レオプロジェクト）以降、バラエティに富んだコラボレーションを通じて独自の世界観をもったプロジェクトを打ち出していく。その創作に挑戦し続ける姿勢は数多くの太鼓グループや太鼓奏者が存在する中でも異彩を放っている。

プロジェクトのひとつ“Blendrums”（ブレンドラムス）は、和太鼓とドラムス、そして、タップダンスが繰り出すリズムだけで構成され、心地よい緊張感と立体感のあるステージを作っている。

ブレンドラムス
*Blendrums : Blend（混ざる）と Drums（太鼓）を組み合わせたレナードの造語

海外アーティストとの公演も多岐に渡っており、1994年に奈良東大寺大仏殿で行われたザ・グレート・ミュージック・エクスペリエンスでは、ボブ・ディラン、ボンジョヴィ、ザ・チーフテンズ、レイ・クーパー、インエクセス、ロジャー・テイラー（QUEEN）などと共演。その後も海外のフェスティバルやツアー、レコーディングを通じて、ザキール・フセイン、スージー&ザ・バンシーズ、アイアート・モレイラ、マックス・ローチ、ドウドウ・ンジャエローズ、マイケル・シュリーブ（SANTANA）など錚々たるアーティストと共演している。

2004年にはザ・クリーチャーズ（スージー・スー名義）のアルバム“HAI!”の制作に参加。全米ツアーとロンドン公演に参加。同年、オリジナル太鼓アンサンブル・レオプロを率いて、アフリカ中東ツアー（南アフリカ、マダガスカル、バーレーン、クウェート）を行う。2007年、アルバム“Blendrums”と弦楽カルテットとのアルバム「蒼い月」を発表し、新境地を開拓。

2007年以降、ブレンドラムスとして海外ツアーが加速し、編成を変えつつも、3度のヨーロッパ・ツアー（イタリア、ドイツ、スイス、スペイン）を成功させている。

2011年にはデジタルサウンドを大胆に取り入れ、新感覚のリズムを創り出したアルバム“Power and Patience”（パワー・アンド・ペイシエンス）を発表。それまでの和太鼓演奏ではあり得なかったデジタルグルーブに乗って叩かれる大太鼓はまさにトランス・ミュージックを彷彿させる。そして、半年後には、“Blendrums”として初のDVD作品“Power of Blendrums”（パワー・オヴ・ブレンドラムス）を発表。また、国立劇場45周年記念公演においてはオーディションで太鼓アンサンブルのメンバーを集めて指導を行い、ブレンドラムスとともに出演する。さらに、4度目のアフリカとなる東アフリカ・ツアー（タンザニア、マラウィ、エチオピア、ジブチ）を全員女性で編成された太鼓アンサンブルとタップダンサーを率いて成功させ、翌2012年には中央アジア・ツアー（カザフスタン、キルギス、グルジア）を太鼓アンサンブルとタップダンサーを率いて大成功に収める。

2013年には文化庁文化交流使に指名され、2013年8月から2014年7月までヨーロッパを拠点に活動を展開。特にダンスとのコラボレーションを積極的に行い、マルセイユ国立バレエ（フランス）、スザンナ・ベルトラミ・カンパニー（イタリア）、レーゲンスブルグ・ダンス（ドイツ）などと創作を行い、公演だけでなくヨーロッパ各地のフェスティバルに多数参加。

レナードの楽曲は各界で高い評価を得ており、“JFK”、“LION KING”、“THE HUNTED”、“THE THIN RED LINE”などのハリウッド映画やダンス・パフォーマンス、オリンピック競技演目、CMなどに数多く使用されている。また、鼓童在籍時に作曲した族（Zoku）、彩（Irodori）、LIONといった楽曲は学校の教科書に掲載されるなど、太鼓の曲として世界的な支持を得ている。

ダンス界においても、アメリカのモダンダンスグループ・ピロボラスから委嘱され、“TSU-KU-TSU”を制作。ダンスと和太鼓のパフォーマンスがひとつになった本作品は2000年にボストンで初演後、ダンスの殿堂ニューヨーク・ジョイスシアターにて3週間公演され、ニューヨーク・タイムズがレナードを大きく特集するなど好評を博す。以降、作品はピロボラスのスタンダードとして世界中で上演されている。この他にも、クラシック・バレエのパトリック・デュポン、ニーナ・アナニアシビリ（1998年に共演）、フリオ・ボッカ、フィギュア・スケートのエルビス・ストイコなどが楽曲を使用している。

父・衛藤公雄は箏（こと）生田衛藤流家元。1950年代、アメリカを舞台に世界的指揮者レオポルド・ストコフスキーや歌手のハリー・ベラフォンテと共演するなど活躍する（2012年没）。重金属打楽器奏者であるスティーヴ・エトウは5つ上の兄。

「レナードの明度の高い祝祭のエッセンスと根源的喜びを切り抜いたところが、説明抜きに民族を超えてメッセージと成り得るに違いない。聴く人はレナードの発する音の形をした自由に身を任せればいいのだ。」毎日新聞／川崎浩

■CDs／全作品レナード衛藤プロデュース
POWER AND PATIENCE (2011年) LEO-0129
GRATITUDE (2008年) NGCL-1003
蒼い月 (2007年) NGCL-1002
Blendrums (2007年) NGCL-1001
OCEAN (2006年) NGCL-1025
Blend (2005年) NGCA-1020
Duets (2002年) NGCA-1006
Leo+1 (1998年/2003年再発) NGCA1013

■DVD／全作品レナード衛藤プロデュース
PRESENCE (2003年) NGBA-1001
POWER OF BLENDRUMS (2011年) LEO-0133

■CDs
スティーブエトウ、レナード衛藤プロデュース
ALIVE in 天川 (2001年) FFCA1002
ALIVE II in YOKOHAMA (2010年) ETO-001

■使用楽器

レナード衛藤が主に使用している平胴大太鼓、かつぎ桶太鼓、チャップシンバルは、いずれも伴奏楽器としての役割をもっていたものだったが、'80年代にレナードが確立したひとつの「太鼓アンサンブル」において重要な役割を果たし、鼓童だけでなく、世界中のエンタテインメントにまで影響を与えた。

平胴大太鼓

フルボディの大太鼓とは異なり、胴が浅いために明るい響きが得られ、バチを変えることで多彩な音色を得られる。長いバチを打面に当てて皮の振動を拾う奏法はレナードのオリジナル。また、木の切り株を加工した台に載せて叩くスタイルは、レナードが「族」を作曲した際に考え出したもので、その後、世界的に伏せる大太鼓が普及していった。

かつぎ桶太鼓

レナードの代名詞とも言える太鼓。韓国や中国、インド、プエルトリコに伝わる奏法からヒントを得て、それらを模倣するのではなく、日本の桶太鼓（馬皮）の音色とリズムを生かして新しい表現を生み出した。まさに今日の桶太鼓のパイオニア。

チャップシンバル

80年代に在籍していた鼓童のメンバーらと試行錯誤しながら、それまでにない奏法やリズムを生み出した。伴奏だけでなく、ソロ演奏もできる楽器へと進化させた典型的な例と言える。

Leonard Eto Official Site <http://leoeto.com>

Email: leo@leoeto.com